

日比谷公会堂御講話（後半）

処でもう一つ私が言いたい事は、キリスト教にある最後の審判ですね。御釈迦様の言う仏滅の世と、

——これは色々な教祖、開祖が言われてますけれど、この二大聖者の事だけに留めておきますけれども、これは最後の審判と言うのはどういうことかと言うと、ただ最後の審判だけでは何か神様がこう思う。地獄でなくこの現世に閻魔様が出て来て裁くんじゃないかというように思うのです、そうじゃない。これはちょっと、未信者的人には、分りにくいのですけど、靈界と言うものがあるのですね、

靈界……。この我々が物質をさわったり、見えたりするの
はこれは物質界、現界……それからその奥に靈界がある。
その中間に空氣界がある。空氣界までは分つてゐるけれ
ど、

靈界は分らない。丁度さつきの野蛮時代から文化時代、
文明時代とこういうような順序です。この三段階のうちの
その物質界、空氣界、靈界……、この三段階なんです。処
が世界の循環率——、循環率によつて明暗ですね、暗くな
つたり明るくなつたり。これが一昼夜の二十四時間にこれ
があるのでなくて一年にも明暗がある。一年の明暗と言

うものは、仮に冬は暗いと言う事になると夏は明るい。こうなるですね。太陽の光線から言つても夏が一番強烈なのです。冬は一番薄いのだからして、これも明暗になつてゐる。これが又、十年にも明暗があり、百年にもある。

歴史上平和時代もあるし、又暗黒時代もあるのは、やはりそう言つた一つのリズムなのです。

それから今度は千年にも万年にもある。それで今迄はこの暗の時代であつた。暗い時代だつた。今度明るい時代になるのです。明の時代。そこでこのさつき文明時代、文明の明の字を書く、明るいと言う字、化ではバケですから駄

目、そうすると明るい時代になると、そうすると、今までの暗い時代のものが整理される。そして私の方で言うと夜の世界と昼の世界、夜の文化と昼の文化——こう言つて居ります——

そうすると夜の文化でいらないものが沢山出来て来ます。昼間になると電灯やいろんなそういうものがいらなくなる、と言うように、夜の時代の此処でいらなくなることは滅びるという事です。

審判は夜昼を分けるのです。いらないものは先ずしまいか、或いは毀す、これから明るいものを段々造つて行く

と、こう言う事です。そうすると、今の靈界が明るくなると、どういう事になるかと言うと、人間にですね、人間と言ふものはやはり体と靈とその間に空氣に相應すべき水分というものがある、これが人間の体に必要である。そういう二段階になつている内の人間の靈ですね。

魂と言つてはいる。それが靈界に屬している。靈界が明るくなると、それの明るさに相應しない魂の人は、どうしてもその相應するようになつてその靈りを取られるのです。取られると言つて何か故意にとる訳じやなしに自然に浄化すべき、汚ないものが、綺麗に替えなければならぬ。そうす

ると魂の汚ない人は、靈界が明るくなるにつれて掃除をされる、それが苦しみです。で、病気の原理もそういう事に説いてあります。それによると病気と言う事がよく分るのです。

今迄は靈と言う事を知らなかつた。さつき徳川さんの言われたように魂です、魂というものの働きというものは、大きなものです、大変なものです。私は、昨日一年ぶり位で來た人がある。処が一年ぶり位でなく一昨日その人の事をちょっと頭に浮かんで、今どうしているのだろうと思つた処が、昨日來たので「ああ靈が先に來てるんだな」と

こう思つた。と言うのはこつちで——、徳川さんが松並と
言う人が、一生懸命に書いている、というのを思つて
いる想念と言つものが向うに行くのです。その人の一
一。その人の体に入るのです。頭へ……。此処までくる
と、ふッと浮かぶのです。

逢おうと言つて、来るようなものです。

要するに靈線と言つてその人に交通するのです。これは
この靈線の何ですね。譬えなんですけれど。恋愛問題にな
んか解釈すると非常に面白いんです。けど今恋愛問題の目
的じやないです。これは信仰に入つたらそう言う事も分つ

て来る。（中略）そういう事が分ると、大いにそういう悲劇や社会悪なんかがなくなるが、それはそれだけにしておいて……。

今言つたような工合に靈です。靈の靈りを明るさに相応するようになる時に、病氣位で済めばいいけれども、そうでなくともっと強く、とても病氣なんか堪えられないで、その人は死んでしまう。病氣と言うものは、少しづつ来るから病氣で、あれでいいのですがね。あれで一ぺんに来たら倒れてしまう。最後の審判と言うのはそれなのです。そこで段々段々この靈界が明るくなるにつれて、

そして一ぺんに、やられることになると、その為に命を失うことになる。それが大量になる。大量になつては可哀想だからと言うので、この事を知らせて助けなければならぬと言つたのが、神様の御意志があるので、私は神様に、それを命ぜられた。そして、こうしてお知らせするわけなのです。そうしておいて、私はですね。つまり釈迦とか、キリストとか言う人が、『天国は近づけり』とか、今にいゝ世の中が来ると言う予言をされた——予言をされたそれですね、キリストはただ予言者で、私は実行者なのだ。それを実行すると、本当にその世界をして、

病貧争絶無の地上天国を造ると、言う事を神様から命ぜられたのです。

その代り私が作るのではないから、決して骨が折れる事はない。万事神様が御膳立しますから、ただその形に表わされたものだけを、やればいいのです。これは、非常な楽なもので。しかし楽だと言っても、責任は重いのです。まあ、恐らく人類肇まつて以来、私位大きな責任を負わされたものではないと私は思うのです。そうするとこれによつて、偉い人達の予言があつて来るのです。ですから私の言うのは、もしキリストや釈迦の言つた予言が、実際実現性

がないとしたら、予言じゃなくて虚言だったのです。いわゆる虚言とは嘘吐きです。あんなに偉い人が嘘を吐くと言う筈がないのだから、いざれば誰かが、実現されるものが出来なければならぬというような意味で、その担当者として私が選ばれたと、こうゆう訳なのです。私はこういう事を、こんな大きな事を言うって事は、実際つらいのです。あんまり大それた事でいいにくいのですから今迄言わなかつたのです。併し段々今言う夜から昼間になる時代が迫つて来ましたから、それに人を救うには早く、大勢の人間に、

それを耳に入れなければいかんと言う訳で、今日初めて大勢の方の前で喋るのです。

さつきノアの洪水の事をちょっと鈴木さんが言われましたが、あれもまあよく似ています。ノアの兄弟というのがありますね、兄弟がやはり神憑りになつて神様から知らされた。

『もうじき大洪水がある、人類の大半はそれに捲込まれてしまう、だから一人でも多く助ける』と言うのでノアの兄弟は非常に奴鳴つた。知らした処が中々信ずる人がなかつた。それで信じた人はたつた六人なのです。ですからノ

アの兄弟二人と合わせて八人です。八人だけは信じた訳です。そうしてどうすればよいかと言ふと、箱舟を作れと言うのです。

ノアの箱舟と言うのは、丁度銀杏の実の形をしたものです。というのはこう言うふうになるのです。だから洪水の時もこの上に、猛獸とか、大蛇とか上つて来る。

その危険を救うために考えた。箱舟を作つてそして待つていた処が、あれは、四十日雨が降つたと言う説と、百日雨が降つたと言う説がありますが、これはどつちみち幾日も続いて降つたのです。——そして段々段々その水嵩が増

して、そして洪水になつたのです。そうすると箱舟に乗つたものだけが助かつたけれど、あとの普通の舟に乗つた人や、山の上に上つた人は、

みんな、猛獸や、うわばみやそういうものが上つて来て食殺した。そうして助かつたのは、その八人だけが助かつたのです。その子孫が今日の白人だと言うことになつていますが、これは大体間違つていないとと思うのです。何故ならば、日本でも伊弉諾、伊弉冉尊ですね。この二柱の神様は、天の浮橋の上で、そうして剣をこの泡みたいなのをかきまわして——こ——ろこ——ろとかき廻してそこに島や国が

生まれたと、こう言う事になつてゐるのです。あれは洪水に違ひないのです。神道の方で言うと、潮干の業と潮満の業と両方あると云うことになつていた。

潮干の業と言うのは、水を干やす訳ですから伊弉諾尊は潮干の業をなすのです。それをした為に島や国と言うのは、あれは洪水の水を捨てたのです。今迄水底にあつたのが現われた——こういう事なのです。

それはノアの洪水の時だと思うのです。こう言うような工合で、今度は、キリストの默示録や色々あります、ヨハネは水の洗礼をすると、キリストは火の洗礼をすると云

う事なのです。ヨハネの水の洗礼はもうノアの洪水ですんだのです。今度は火の洗礼となると、それはやはり大変な、大きな悪払いです。

火の洗礼に就いては、色々の又、意味があるので、大分時間が来ましたから、これだけにしておきます。

（日公 昭和二十六年五月二十二日）